# 日本スポーツ社会学会だより

第8号
1994.6.25.

Ⅰ．諸報告
Ⅱ．日本スポーツ社会学会第3回大会報告
1.『特別セッションースポーツと社会発展をめぐってー』
2.『公開シンポジゥム「スポーツイベントと市民参加」』
3.『一般発表の部』
4.『一般シンポジゥム「スポーツと身体をめぐる問題について」』
5.『今回の大会の運営を企画して』
6.『学会大会に参加して』
Ⅲ．会員異動

発行　日本スポーツ社会学会事務局
〒305　つくば市天王台1－1－1
筑波大学体育科学系　スポーツ社会学研究室内
Tel.　0298－53－6378
Fax.　0298－53－6507
振込口座　日本スポーツ社会学会事務局
00350－7－11129

Ⅰ．諸報告

１．理事会報告

日時：３月３０日（学会第１日）午前１０時３０分～１２時３０分

議題：総会議案について

(1)1993年度事業報告

・理事会報告

・編集委員会報告

・各委員会報告

・事務局報告

・その他

(2)1993年度会計報告

(3)1994年度事業案

・理事会案

・編集委員案

・各委員会案

・事務局案

・その他

(4)1994年度予算案

(5)その他

・会則の改訂

・その他

２．総会報告（１９９４年3月３０日、愛知大学）

(1)『スポーツ社会学研究』第２巻の発行に関する決算報告

1)　収入　　７００，０００円

2)　支出　　６７３，１１４円

①印刷費　　５４０，７５０円（１２０頁、３００部）

②会議費　　６０，１６２円（飲物、お菓子、軽食など）

③通信費　　４０，６９３円（査読者への依頼、事務連絡など）

④交通費　　２４，７００円（編集委員の交通費）

⑤事務費　　６，８０９円（文具、封筒、コピーなど）

3)　収支　　２６，８８６円

機関誌編集委員会代表　江刺　正吾

(2)日本スポーツ社会学会会則の改訂について

次ページのような改訂案が出され、第５章第１３条については、理事会で検討することになったが、それ以外は了承された。

(2)事務局報告

1)平成５年度　決算書（２月末日決算）

①　収入の部　　１，１６４，４１６円

②　支出の部　　１，１１７，９６４円

③　差引残高　　４６，4.５２円

日本スポーツ社会学会会則改訂案

提 案 者　　日本スポーツ社会学会第２期理事会

１．会員種別に関する会則の改正について：会員にあらたに購読会員を設けることの件

現会則

第３章　会員
第５条　会員の種別は次の通りとする。
　１　正会員：－略－
　２　賛助会員：－略－
　３　学生会員：－略－

改正案

第３章　会員
第５条　会員の種別は次の通りとする。
　１　正会員：－略－
　２　賛助会員：－略－
　３　学生会員：－略－
　４　購読会員：本会の目的に賛同し、本会が刊行する「スポーツ社会学研究」を購読する団体及び個人は購読会員となることができる。

第７条　所定の入会申込書を提出し、理事会の承認を受けた会員は、次の会費を納入しなければならない。

　１　正会員　：　５，０００円
　２　賛助会員：２０，０００円以上
　３　学生会員：　３，０００円

第７条　－略－

　１　正会員　：　５，０００円
　２　賛助会員：２０，０００円以上
　３　学生会員：　３，０００円
　４　購読会員：　３，０００円

２．総会の成立定数に関する会則の改正について：定数の規程を削除する件

現会則

第５章　会議
第１３条
　２　総会は、正会員の過半数の出席（委任状を含む）により成立し、会則改正を除き、出席者の過半数をもって決定する。

改正案

第５章　会議
第１３条

３．役員選出細則の改正について：有権者名簿の作成にかんする条文の削除の件

現会則

第５条（有権者名簿）選挙管理委員会は、会員の専攻分野と所属領域とを記載した有権者名簿を作成するものとする。専攻分野は会員の申し出にもとづき、地域は原則として現住所によるものとし、都道府県別で表記する。有権者名簿は会員住所録をもってかえることができる。ただし、被選挙権、選挙権ともに当該年度までの会費納入者に限る。

改正案

第５条（有権者名簿）有権者名簿は、会員の住所録をもってかえることができる。ただし、－略－

付則
　２　本会則は、平成６年３月３０日より施行する。

①収入の部内訳

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | 403,233 | 前年度繰越金 |
| 会費 | 645,000 | 会員会費 |
| 学会誌売上げ | 57,500 | 学会誌売上げ代 |
| 雑収入 | 58,683 | 利息、広告費、その他 |
| 合計 | 1,164,416 | |

②支出の部内訳

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 学会誌関係 | 701,236 | 印刷代 |
| 学会だより | 162,690 | 印刷代 |
| 通信事務費 | 157,857 | 切手、葉書、郵送費他 |
| 理事会経費 | 50,162 | 選挙費用他 |
| 事務局作業補助 | 13,759 | 事務用品他 |
| 雑費 | 32,260 | 払込手数料他 |
| 合計 | 1,117,964 | |

③差引残高

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | 46,452 | 次年度繰越金 |

2)平成6年度予算案

①収入の部　1,268,817円
②支出の部　1,268,817円
③差引残高　0円

①収入の部内訳

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | 46,452 | 前年度繰越金 |
| 会費 | 1,000,000 | 会員会費 |
| その他 | 222,365 | 広告費ほか |
| 合計 | 1,268,817 | |

②支出の部内訳

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 学会誌関係 | 700,000 | 印刷代 |
| 学会だより | 120,000 | 印刷代 |
| 通信事務費 | 180,000 | 切手、葉書、郵送費他 |
| 理事会経費 | 170,000 | 選挙費用ほか |
| 事務局作業補助 | 80,000 | 事務用品ほか |
| その他 | 18,817 | 払込手数料ほか |
| 合計 | 1,268,817 | |

③差引残高

| 項目 | 金額 | 備考 |
|---|---|---|
| 繰越金 | 0 | |

3)会費滞納状況

| 年度 | 滞納者 | 会員数 |
|---|---|---|
| 1991年度(H3) | 0 | 188 |
| 1992年度(H4) | 21 | 211 |
| 1993年度(H5) | 75 | 232 |

## Ⅱ．日本スポーツ社会学会第３回大会報告

### １．『特別セッション－スポーツと社会発展をめぐって－』

スポーツがその社会でどのような状況にあり、どのような機能を果たしているか、また果たし得るものとして期待されているか、といった問題はスポーツ社会学者として関心の深い領域ではないでしょうか。

とくに、ソビエトの崩壊を頂点とする社会主義体制の崩壊もしくは揺らぎの問題は、現代の国際政治構造を大きく変えています。このような状況の中で、国内のみならず海外のその社会のスポーツの現状とそれがどのように社会発展と関わりを持っているかについて考える機会をもてたことは意義深い試みであったと思われます。

今回は、中国、韓国、それにブラジルからの最もふさわしいと思われる先生に講師としてご出席して頂きました。しかしながら、誠に残念なことですがMauro Betti先生（ブラジル）は、航空費のグラントが得られず、先生自らの参加は実現されませんでした。しかし先生の特別セッションに対する熱い思いは、「Sociology of physical Education and Sport in Brazil; past,present and future」と題する小冊子配布という形で参加を果たされました。紙上をお借りして先生の御誠意に感謝申し上げます。

というわけで、実際には中国と韓国の先生方からご報告を頂き、討議にはいりました。まず、両国のスポーツの現状と社会発展について凡そ次のような報告が提示されました。

○中国体育運動発展の現状と課題（藩志、『中国学校体育』編集副主任）

近年中国の体育・スポーツは、開放改革政策に対応している。その骨子は市場経済導入に伴うものであり、スポーツの社会化とスポーツの商業化という２つの側面に集約される。

(1)スポーツの社会化

エリート・スポーツの振興は国際スポーツ水準の向上を促し、国家発展にも資するものとして位置づけられる。この意味で、中国におけるエリート・スポーツの振興は（かつてのピンポン外交時代にみられた“友好第１、戦績第２”ではなく、勝利志向である）、中国型社会主義国家建設に活用されなければならない。

と同時に、大衆スポーツの振興も国家的使命のひとつである。それは従来の福祉型から、経営型へと転換されつつある。この背景には、開放改革政策があり市場経済導入への対応がある。すなわち、スポーツは従来の単なる人民の福祉向上に供するものであって利潤の対策であってはならないという考えからの脱皮である。

(2)スポーツの商業化

市場経済の導入は、競技者とスポーツ組織双方に変革をもたらしている。勝てばカネなる風潮は、競技者の思考・行動様式の基底に定着しつつあり、コーチの外流（海外流出）に顕著である。また、スポーツ産業の発展という形に市場経済への対応をみることができる。

このような状況の中で、スポーツは、従来の社会主義国家建設に供するものから自らの利益を追究するものへ著しく変化を遂げている。

○韓国スポーツの現状と課題（林繁藏、国立ソウル大学教授）

近年韓国における体育・スポーツは、著しくその高度化と普及化が計られれている。とくに、ソウル五輪（１９８８）前後から変化が著しく、国民の福祉向上と国家発展に寄与するものとしてスポーツに集約される。

(1)生活体育（sports for all）の推進

国民の生活水準の向上は、（所得と余暇に大いに準拠しているが）スポーツ欲求を増大させ、国家が支援する体制を整えつつある。そして、それは商品化と無縁ではない。また、学校体育の狙いのひとつもスポーツの社会化にあり、従来のエリート中心のスポーツ風土

からの脱却を図りつつある。

(2)スポーツ水準の高度化

国家発展に対する戦績の寄与は、とくにソウルアジア大会（１９８６）とそれに続くソウル大会（１９８８）に位置づけられ、国家的戦績確保体制が敷かれ、大いにスポーツ水準を引き上げている。これが牽引力となって、またその反省から学校体育の見直しおよび生活体育の推進が計られている。

両国共にスポーツの普及化と高度化が志向されており、その背景には体制の違いがみられるにも拘らず、共通点が存在する。それは商業化と社会発展への寄与である。

これらの報告をふまえて、主としてスポーツの社会発展への寄与がもつ問題点とこれらの事態に対する討議がなされた。この特別セッションに対するお二人の先生の明快且つ示唆に富んだ報告と討議、および会場の先生方のご協力に感謝申し上げます。これを機会により一層海外との交流が深まることを祈念いたします。

藤原　健固（中京大学）

## ２．『公開シンポジゥム「スポーツイベントと市民参加」』

### 公開シンポジゥム「スポーツイベントと市民参加」に参加して
### ーー「開かれた学会」はいかにして可能かーー

わが学会大会も３回を数えることによって、学会主催のシンポジゥムに「市民参加」の実質を盛り込む企画がなされ、「開かれた学会」の貴重な第一歩を印したというのが、先ず私の感想である。一連の大学改革問題の中で「開かれた大学」ということが唱えられ、かなりの大学でもその取り組みがなされたはずだが、こちらの方はやや色褪せた感じがしないでもない。それに比べ「開かれた学会」というのはまだ新鮮な感じがするのはなぜであろうか。公害問題が世間の関心を集めていた頃、いくつかの関連学会で研究者や学者たちの社会的使命が問われ、「市民参加」が実践されたことがある。その成果を学会構成員の間で十分に明かにしえないうちに、また元のアカデミズムに戻ってしまったという印象を私は持っているが、まだ生まれたばかりの日本スポーツ社会学会ではとりあえずは「初物」であり、だから新鮮に感じたというのであろうか。

ここではシンポジゥム全体についてのコメントというよりは、文字どうり「市民参加」してくれた学会員以外の参加者にとってもまた我々学会員にとっても「開かれた学会」というものが意義あるものであり、成果を生み出すものであるためにはどうあるべきか、という観点からコメントしたい。

演者に学会員以外のいわゆる「市民」が加わり、フロアーにも決して多いとはいえないれど何人かの方々がおられ、通常の学会大会には見られない風景であったが、討論の中身自体は十分にかみあっているとはいえず、司会の私自身も欲求不満が残った。その原因はこのシンポジゥムの「ねらい」（抄録集に私が書いた＜討論のねらい＞は現地実行委員会の求めに応じて期限内に書き送ったが、企画段階での打合せでどのような「ねらい」が示されたのか、また各演者たちにどのような了解がなされていたかはわからず仕舞いで勝手に書いた）と一応の到達点が司会者の側にも十分把握できていなかったからではないかと、今はほぞを噛む思いである。これこそ後の祭で、事前の準備が大事だというイベント企画の初歩的原則を踏み外している。

討論の中でも「市民参加」というが「市民」という言葉にどれだけの生活実感があるのか、また参加する選手自身に市民意識があるのか、という指摘もあった。総じて「市民参加」をどうとらえるのかという点で解釈に幅があり過ぎなのかなとも思った。また「市民」との協力・共同との関係を通してのみ「市民参加」の実質をつくりあげることができるだろうと考える私には、荒井会員の研究者の果たす役割論と委員会の論理などの主張に対して素直に受け入れ難いものがあり、「行政にやさしいプレッシャーをかける」という言葉同様に私には行政と「いかにうまくやるか」という、荒井氏一流の「戦術論」は聞けたが、

日本のスポーツ状況ーーとりわけ「スポーツ・フォア・オール」という観点でどのような戦略論があるのか、ということが非常に気になる表現であった。

これはシンポジウム全体の構想に関わるが、「市民参加」（この言葉自体がまだ会員間に共通理解されていないが）は目的なのか、手段なのか、言い換えれば戦略そのものなのか、イベントを仕掛ける側の「人集め」の単なる手段・方法なのか、ということである。福岡のユニバーシアードにしろ、広島のアジア大会にしろ、行政当局は口がさけても「手段・方法」とはいえないが、広告代理店や競技団体の者ならそれは言えよう。だがこの場合研究者は一体どういう立場に立つのか。障害者スポーツから発言した斉藤さんには「住民総参加」のファッショ的構造と「国民各層の参加」をうたう国体の欺瞞性が見えていたが、果たして研究者には自明のことであったのだろうか。こうしてみると「Ｊリーグは将来構想として市民参加を視野に入れている」という宮崎さんの主張は、白石さんのボランティアによる「市民参加への新たな定義」ということも合わせて、それがほんもの（市民を裏切らないという意味での）となるための地域的条件とりわけ地方自治体と住民をめぐる地域民主主義の成熟度が問題になろう。

「スポーツ社会学に未来はあるのか」という荒井氏の問題提起は、実は戦術論や方法論によって展望を切り開くというよりは今日のスポーツやスポーツ社会学が置かれている社会的構造・位置を分析・解明すると共に、その構造転換のための戦略論を問題にすることによって、研究者やスポーツ愛好者がなぜ、どのような方法によって市民（国民・住民でもいいが抽象的概念であるよりは具体的な協力・共同ないし連帯の層としての）と手を結ぶ必要があるのかということが明らかになると思われる。またそのことを強く自覚することによって「開かれた学会」の真の意義と成果が求められるのではなかろうか。

森川　貞夫（日本体育大学）

## スポーツイベントと市民参加について

参加料は無料です、と銘打ってスポーツ社会学会の初めての試みである、だれでも参加できる「公開シンポジウム」が、学会初日の午後開催された。一般市民、教員、学生の方々の参加と発言を得て、これまでにない雰囲気のシンポジウムになり、この模様がＮＨＫテレビのニュースで放映されるなど、所期の目的は十分とは言えないまでも、「一般公開という趣旨は実現できたと考えられる。

四人の講演者の発言主旨は、それぞれの方々の発表要約に譲るとして、公開シンポジウムの反省点を述べてみたい。

テーマのキーワードである「スポーツイベント」について、講演者も会場の参加者も、それぞれの想い描く「スポーツイベント」を前提にして発言していたため、論点がかみあわない現象が見られた。東海地区の会員による大会準備委員会でも、事前にこの点について指摘があり検討を重ねた。その結果、多様なスポーツイベントが存在することと、多数の発言と討論を生み出し、活気あるシンポジウムにするために特定のものに限定しないほうがよいのでは、と言う結論に落ち着いた。

今後このようなテーマで企画する場合は、特定のイベントに限定して、多様な角度からの討論を展開すれば、より深みのある内容になる気がする。

今回、公開シンポジウムの広報という事で、新聞、テレビなどの報道部、運動部、スポーツデスク等の方々と接触を持って、「スポーツ社会学」が一般的に認知されていないことを痛感した。彼らから、スポーツ社会学会が設立されて３年目だとしても、これまで多くの研究者が存在した事実を理解すれば、社会に対する発言が少なすぎたのではないだろうか、という指摘を多く受けた。発言をしていても、それが研究者の仲間内であったり、あるいはスポーツや体育の関係者に向けての発言が主だったため、私達ジャーナリズムの世界にも、一般社会のなかにも、スポーツ社会学者からの発言が聞こえにくかった、と述べている。

スポーツがこれだけ人々の注目を集め、多様な機能を持ち、社会現象としても人々が避けて通れなくなっている現状を考えると、もっと積極的な発言があって然るべきである。

シンポジウムの中で「スポーツイベントにおける地方対東京」、「都市の祝祭と田舎の祝祭」が問題にされた。情報化社会の進展や交通網の発達は、文化の中央集権化を益々加速させて、地方都市や田舎の文化を衰退させてはいないだろうか。中央の文化を速攻で地方にばらまき、田舎の若者を地方都市を素通りさせて大都市へ集めてしまい、国民が等しく文化に接し、享受しているかのような錯覚を起こさせている。スポーツ文化も、スポーツイベントについても全く同じ現象が起こっている。地方都市が住民のスポーツ環境を改善できないまま、Ｊリーグの誘致合戦を繰り返している現実は、文化の中央集権化のよい例である。高橋義夫は「文化の一極集中から脱却して、多様性のある文化の地方分権を要求する」が、既に柳田邦男によって１９２９年に発表された『都市と農村』に、半世紀以上も前から指摘されているとしている。中央集権は、中央対地方という単純な構造ではなく、政令指定都市等の大都市対地方都市、地方都市対町、更に、と何層にもそして複雑な展開を見せながら進展している現状で、地方に対抗文化が存在する必要を感じる。

このような状況を考えると、スポーツ社会学の研究者が果たす役割は更に増加し、それに伴う発言も必要で、重要になってくると思われる。

塙　敏（中京女子大学）

## 「スポーツイベントと市民参加」レポート

1.報告の前提

既に１０年近くも昔になるかもしれぬ。日本体育学会の体育社会学のシンポジウムで「スポーツ社会学者のくせ」云々というタイトルで、スポーツ社会学的思考の情けなさ（それは一言でいえば、社会学という大樹に寄るばかりの独自性の欠如）を批判した。今回、私にしては自らシンポの発表を希望するなど積極的だったのは、あれから１０年、この頃になるほどこの寄らば社会学の大樹的くせが直らぬばかりか一層ひどくなるばかりという気がしてなかったからである。勝手にやればとクレヨンしんちゃん風に済ませなくもないが、トレンド追随の今のスポーツ社会学にマーケットとしての未来がセットされない不安が私などには感じられてしかたがない。感じない人はいないと思うが、あまり強く感じないのは、教育学部の中のスポーツ社会学という他に比べれば専門という確としたシートが用意されているからである。しかし、このリザベーションも根本的には教育としてのスポーツから文化としてのスポーツへの離脱を許さない仕組みになっていることは動かしがたい。いずれにせよ、当日私が、公開シンポの中でターゲットとしたのはスポーツ社会者、正しくいえば体育学部、体育学科育ちの彼ら、勿論自分を含めてである。

2.報告の概要

一言でいえば、市民参加という対象をファジーにする用語に惑わされずに、行政と一般市民の間に、委員会集団という専門家グループがいる、そこを市民参加の橋頭堡にしようという策略である。60～70年代のデモや署名に替わるファックスやアイディア公募などの市民の直接参加はあるにしても、現段階ではそれらはあくまでもマイナー。市民と行政の間をコーディネートする委員会の中に専門家としてのスポーツ社会学徒は介入していくべきという提案をしたつもりである。更にいえば専門家は既に広告代理店や東京大手コンサルタント集団、東京在住一部特定研究者に指命が慣例化している。そこら辺りを断ち切ることなく文献の中でのみブルデューだ、ホーンだなどと批判的なことを言っているつもりになっても無力。委員会が活性化せねばならぬ。委員会の中に入らねばならぬ。入って一言言わねばならぬ。広島出身の哲学者中井正一は昭和12年に言っている。「手を挙げよう、どんな小さな手でもいい」と。

3.報告を終えて

いやあ惨々であった。「あいかわらず」「一番ワンパターンは、あんた」「柔軟性がない」などと懇親会の後の2次会の小宴。本当の独自性、社会学的想像力とは何かを「ローテーション社会ー環境・施設・集団つくりビジョンー」（第一法規出版1700円、5月刊行）の中で言っているから、一読願いたい。なお50を目前としたスポーツ社会学ＯＢとして院生諸君へ一言。寺山修司の「書を捨てよ、町に出よう」を読んだか。大学が街から消え、バイトに忙しく、業績上げるのに必死にならざるを得ない院生諸君。ゆとりもなく出ていく町もない中でこそ、「書を捨てよ、町に出よう」の批判精神をこそキープしてもらいたいと思う。余計なおせわですみません。（１９９４年４月２５日記）

荒井　貞光（広島市立大学）

## 福岡ユニバーシアードにおける市民参加戦略

(1)課題としての市民参加

ユニバーシアードのような巨大スポーツイベントにおいて、市民参加は観客としてしかありえないように見える。しかし、それは誤りである。逆に、福岡ユニバーシアードは市民参加を必要とする。福岡市は「税金」を使ってユニバーシアードを開催する「意義」を創出せねばならない。「市民参加」はこの意味創造の戦略の中から生み出される。

(2)福岡市の市民参加戦略

市民参加のための第一の戦略は、巨大スポーツイベントにおける「市民参加」の定義を創出することである。その創出された市民参加の定義とは①ボランティアとして（つまり自発的な意志で）、②都市祝祭という「イベント」へ参加することである。すなわち、ユニバーシアードにおける市民参加とは、都市に降り立ち、やがて消滅していく神聖な劇に参加するのである。この意味で、ボランティアによる参加は、現世的利害だけには還元できない神聖な意味を持つことができる。オリンピックに端的に示されるような神聖性をもつ巨大スポーツイベントは都市祝祭としてうってつけであり、「100万ドルで買いつける（地元経済誌）」だけの価値のあるものである。

第二の戦略は市民参加を「ホスピタリティ」と結びつけることである。ホスピタリティとは「暖かく迎え入れ、さまざまな便宜を無償で提供する」ことである。このホスピタリティという概念は接着剤の役割を果たす。第一に、「無償」であることでボランティアと接合し、「迎え入れ」という点で市政と接合する。「人と人との支え合い、出会い、交流は市長のスローガンであり、他者の集まりである商業都市である福岡市の経済と市政のキータームである。ユニバーシアードへ参加することは、この「出会いと交流」に参加することなのである。

第三の戦略はアジアを強調することである。参加者はアジアだけではない。しかし、新聞ではアジアの学生選手への支援が強調され、そのための募金キャンペーン（カバブー募金）が展開される。このアジア強調戦略は、福岡市の都市戦略を背景とする。福岡市は自らをアジアの玄関口と自らを定義するが、これは独自性を強調する差別化戦略であり、ユニバーシアード誘致が「国際都市FUKUOKAを世界アピールする（市発行パンフ）」機会であり、都市間競争を勝ち残るための都市戦略であることを如実に示すものである。

巨大スポーツイベントにおける市民参加の問題は「みんなのスポーツ」や生涯スポーツとは異なる地平にある。競技者としての参加のみを市民参加と捉えるならば、巨大スポーツイベントにおける市民参加はありえない。しかし、都市祝祭への参加として捉えるとスポーツをとりまく巨大な文化装置が見えてくる。スポーツ「イベント」を足がかりにして社会の文化装置に迫ることはスポーツ社会学研究の一つのありかたであろう。

白石　義郎（久留米大学）

## 愛知国体とは
## ――障害者スポーツから見えてくるもの――

今回の公開シンポジウムのテーマである「スポーツイベントと市民参加」の現状での問題点がもっとも極端な形で現れているのが国民体育大会、いわゆる国体ではないだろうか。

まず大きな問題として、実体のない「市民参加」が既成事実として積み重ねられるということがある。今年１９９４年、愛知県では愛知国体（わかしゃち国体）が行われるが、その中で一番大事な要素が「県民総参加」ということである。たとえば、国体県民運動と称して「美しい郷土を作ろう」「健康なからだをつくろう」「親切で豊かな心を育てよう」というスローガンを打ち出している。「美しい郷土をつくろう」ということで花いっぱい運動が行われたり、「親切で豊かな心を育てよう」ということで交通ルールを守ろうというようなスポーツを行う上で関係のない活動を大々的に行うのである。行政は町内会や各種行政関係の団体を動員してそれを「県民総参加」と称するのであるが、実体は一部の人が行っているのにすぎないのである。そしてこのようにして市民を巻き込もうとしてもうまくいかないところに今の国体の限界を示している。

この既成事実の問題でいうと、国体では開催県が優勝する（天皇杯授与）ということが至上命題になっており、そのことを実現するためにジプシー選手や八百長が横行しているのが現状である。これも競技以前のことが競技自身に影響を与えている問題である。

次に大きな問題としてあるのが、大きなスポーツイベントを行うことで大規模な環境破壊が行われるということである。愛知国体でも大規模なテニス場や射撃場が建設された。名古屋市内のテニス場建設では、一部の駐車場部分を開発する面積から除外することで環境アセスメントの対象となる面積をクリアしていた。また、５０億円かけて２４．７千平方メートルの山が切り開かれて射撃場が作られたが、小口径ライフルの県内競技人口は３５０人、大口径ライフルになるとたった４０人しかいないというのである。このようなお金の使い方が許されるのかと素直に思ってしまう。

愛知国体の場合だとはっきりしている部分だけでも国体関連総事業費は総額４４８億円というのである。いったい国体についてどれだけのことを市民に開かれた場で議論してきているのだろうか。議会も全会一致で賛成しているということできちんとお膳立てができているのだが、市民に開かれていない現状の政治状況の中ではそれも既成事実の積み重ねの一つとなっていることは否めない。どうもこのようなことは、ビックスポーツイベントにはビック施設をという安易な考え方で行政が施策を進めることを容認してしまう点に原因があるように思う。

さらに国体でいえば、スポーツは善、住民参加、地域活性化などということが金科玉条なってあらゆる批判を飲み込んでしまうのである。それによって国体に反対するような人がいると「過激派」などといったレッテル張りが堂々と行われるのである。そのようなことをすることで同時に活性化の要素、いきいきしたものがすべて壊されていることに、そして今や国体は政治や経済の論理なしには存在し得ないということに早く気づくべきなのである。

ではどうすべきなのか。まず「競争」というものをまず考え直してみるということが必要である。例えば、障害者スポーツというのはまず健常者を排除して存在しているものである。そして現在の障害者スポーツはその障害者をさらに細分化してしか存在していない。なぜならそうしなければ「競争」というものが成立しなくなってしまうからである。もし障害を持つ人と持たない人が何らかの形で同じ競技を行うということにすれば「競争」は意味を失うのである。そんなイベントであれば様相は一変する。このぐらいの発想の転換をしないと、もうスポーツイベントは多くの市民一人一人にとって消費対象（テレビ中継の放送を含めた）のほか何物でもないという存在になってしまうのではないだろうか。

今、なぜ国体を行わなければならないのか、スポーツイベントを行わなければ成らないのかということをよくよく考えてみたときに「ずっとやっていることだから」とか「地域

を活性化したい」とかいうようなこと以外の理由があるだろうか。多分ないのではないだろうか。本当に市民が必要としているものは立派なスポーツイベントではないはずであるだから現段階で私たちがスポーツイベントを考えるとしたときに必要なことは大胆な競争原理からの脱却なのである。

斉藤　亮人（わっぱ共同印刷所）

## 市民参加は実現するか　――Ｊリーグの挑戦――

「当面はトヨタをはじめ出資二十社にメセナ的に支援してもらう形です。しかし、ゆくゆくはドイツのバイエルンミュンヘンのようなクラブ組織にしたい」　Ｊリーグ・名古屋グランパスエイトの西垣成美代表は、クラブの将来像を熱っぽく語ってくれた。

Ｊリーグは「スポーツ文化の創造」という理念を掲げている。地域に根ざしたクラブ組織をつくることで、日本のスポーツの土壌を根底から変えようとしているのだ。西垣代表のいうクラブの将来像とは、多数の市民会員が存在し、能力に応じてチームが作られ、トップチームはそのシンボルの役割を果たす――というピラミッド型組織だ。市民はクラの施設で気軽に汗を流し、クラブハウスでくつろぐことができる。この市民参加の視点そが、Ｊリーグの最大の特徴といえる。

グランパスエイトが、サンフレチェ広島、鹿島アントラーズなどとともにいち早く会社名からも、クラブ名からも出資企業の名を消したのは、Ｊリーグのこの壮大な理念の実現に取り組む決意の現れだ。「実現まで三十年はかかる」といわれる構想だが、グランパスエイトでは、近く施設や指導者、費用についてのリサーチを始めるという。

今年三月の日本スポーツ社会学会の公開シンポでは、パネリストの白石義郎・久留米大学教授が専門家の立場から「Ｊリーグは失敗すると思う」という見通しを示された。確かに、今の人気を維持してこの構想を実現することができるかどうかは予断を許さない。

ただ、日本のスポーツにかつてなかった理念を持ってＪリーグが登場した意味は大きい９２年のナビスコ杯からスタンドで見続けている立場から感想を述べれば、日本人のスポーツ観は確実に変わってきている。プロ野球の観客と比べると、サッカーのサポーターは一見過熱気味に見えながら、一定の距離を保っているように見える。その根底にあるのは「自然体で楽しむ」という姿勢だ。

また、Ｊリーグの試合会場は広告だらけで、プロ野球以上にコマーシャリズムの波にもまれている。それでいながら、スタンドとグラウンドとの熱く、それでいて節度のある関係は、何よりもスポーツを愛する人々の空間であることを実感させる。試合内容と無関係に歌い、踊る観客もいない。日本のスポーツは「する人」と「見る人」が分離しているがＪリーグは将来の市民参加を通じてトップチームとそれを支える市民とを結び付けよう試みている。このことは実に興味深い。

Ｊリーグ熱を受けて、等々力、瑞穂など自治体の持つスタジアムの改修も行われた。うしたことに税金を使うことが可能になったのも、Ｊリーグが公共的な理念を持ち、企業スポーツと決別したからだ。逆にいえば、自治体や地域の市民、企業の支援を受けることになったＪリーグと各クラブはこの理念、構想を実現する義務を背負ったといえる。さて、「その日」はいつやってくるだろうか。

宮崎　健二（ライター）

3．「一般発表の部」

【第１会場・前半の部】

(1)藤原　健固「第二次世界大戦後における政治的経済的被利用価値としての五輪とソウル五輪の位置」

オリンピックは今日では一つの巨大なスペクタクル（ジョン・マカルーン）であり、その政治的経済的機能については既に様々に論じられてきた。

藤原らの研究は特にソウル五輪に注目し、韓国社会の政治と経済に関連付けてソウル五輪の意味を探った。

発表の内容は大会の抄録集を参考にしていただくとして、大会に向けての選手養成についての発表とその討論を聞いて以下の感想を持った。ソウルには大規模な選手養成のための合宿所（訓練院）があり、五輪の数年前から強化合宿が行われていた。８８年の大会直前には、コーチの選手に対する対応が原因で、何種目かの強化選手が訓練院を脱走する事件があった。ソウル五輪の政治的経済的側面と、これらの選手養成の関連性についての言が聞きたかった。

(2)張　世昌他　「韓国スポーツ政策における青少年の健全育成に関する研究ーその法律の成立過程と組織を中心にー」

１９８０年代の韓国の高度経済成長に伴う社会的環境の変化によって、青少年の非行の暴悪化など、青少年問題が深刻化した。その対策として１９８６年に青少年育成法が制定され、民間の韓国青少年研究院の設立と、行政レベルでは、体育部が体育青少年部になるなどの変化があった、という報告があった。

これらの政策が現実にどの程度、所謂青少年問題に効果があったのか、また青少年問題の発生やその対策が、ソウル五輪の開催と何らかの関係があったのか、等について聞きたかった。

(3)中村裕司　「スポーツ行政組織をめぐる一考察ーイギリスのＳＡＲＤと日本の文部省体育局の比較を通じてー」

ＳＡＲＤ（Sport and Recreation Division）は１９９０年、環境省から教育省へと移管された。その後１９９２年には国民文化財産省（ＤＮＨ）が設置され、再度、ＳＡＲＤもここに移管された。わが国では１９２８年に文部省に「体育課」が設置されて以来、現在の体育局に至るまで、ずっと文部省に置かれたままである。

わが国のスポーツ行政は成人のスポーツを教育の一領域として捉える傾向にある。それ対してイギリスは、ＳＡＲＤがＤＮＨへ移管されたことでもわかるように、スポーツを文化として捉え、その他の文化、芸術、放送、映画、観光、遺産等との関連のなかでスポーツ行政を実践していこうとしている。

討論では、ＳＡＲＤの性格と将来の可能性、さらにはイギリスにおいてなぜこのように行政組織が比較的簡単に、短時間のうちに変更、移管が可能なのか、新省の設置と枢密院令との関連などが話し合われた。

小椋　博（天理大学）

【第１会場・後半の部】

多少の出入りはあったが常時３０名の聴衆が集り、盛会であった。

まず、横井会員（中京大学大学院）の報告は、これまでの分類で言えば「スポーツ指導者論」というべき内容であった。宮内（早大）・森川（日体大）両会員は、調査の技術的問題点を様々指摘し、さらに面接調査と質問紙調査の有機的関連性の必要性を強調した。高野連の掲げる理念と現実のギャップを論じるのであれば監督への「アンケート」では不

十分であろうし、これまでの指導者論の研究成果へも言及する必要があったろう。
さて、清水エスパルスを支えた市政・住民をテーマとした鈴木会員（法政大学）、地域スポーツ研究の成果と課題を論じた小久保会員（筑波大学大学院）が「地域とスポーツ」に関わる報告をした。前者は特に現在Ｊリーグ隆盛の中での報告であったので、参加者はもちろん筆者も大いに期待した。しかし、長屋会員（兵庫県立看護大）・中村会員（宇都宮大）の質問に表われていたように、フロアーには清水市行政の内実や市住民の日常生活感覚へ肉迫する実証的研究を期待して待っていた「欲張りな」聴衆が多かった。都市の自治体行政を専門とする中村会員にその失望の色が濃かったように思う。
小久保会員には、研究史を整理する「作法」へ森川会員から厳しい注文がついた。唐木・関両氏らの一橋大研究グループとは一線を画して独自に実証研究を進めて来た氏からすれば当然の注文である。「地域スポーツ研究の到達点と課題」とビッグタイトルを付けたのであるから、その課題の大きさに研究努力が見合っていなかったと反省すべきであろう松村の概観（「地域スポーツの社会学　再考」『地域づくりとスポーツの社会学』道和書院）から一歩も抜け出していなかったことに不安を感じる。都市コミュニティとスポーツの領域では、前述の森川会員の他、堺会員（愛媛大）、中島(豊)会員（名古屋大）・西垣会員（愛知県立芸術大）、中山会員（島根大）らの周到な仕事が蓄積されて来ていることを報告者は知らなかったのだろうか。
司会をしていて感じたのは、３報告者とも大変若い研究者であるがその若さがでずじまいであったことだ。日本を飛ばして「地域」と世界がネットワーキングしている清水の事例は、「もっと『スポーツ社会学』に拘って、スポーツの特性を考えろ！」と喝破した藤田会員（日本福祉大）の思いに応えられる素材であったはずだ。再度鈴木会員に報告してもらいたい！、これは司会者の感想ではなくフロアー全員のものである。現場の熱気と積み重ねられた歴史に報いるためにも、このままではエスパルス・サポーターが黙ってはいまい。また、研究史の整理という地味で報われることの少ない基礎的作業に取り組んだ小久保会員には、報告を論文作成への糧として新たな「課題」を提案して欲しい。
平野会員（法政大）が最後に提案された「マクロな日本社会の動きとシンクロナイズするスポーツ」の問題は、時間不足というよりも学会全体の力量不足が災いしてその議論に飛込めなかったのだと筆者は理解している。今後の大きな課題であろう。
大いに盛り上がった部会であったこと、参加されなかった会員の方々にも伝わっただろうか。熱心で教育的なフロアの諸先生方に感謝いたします。

松村　和則（筑波大学）

【第２会場・前半の部】

スポーツ的社会化研究

(1)吉田毅（九州大学）　「スポーツ的社会化論の課題に関する一考察」
吉田氏はKenyon等の研究以来、多くの成果が蓄積されつつあるけれども、それが必ずしも「スポーツ的社会化」の意味を明確にしてきたとは言えないとし、このMcPhersonのたとえるようなcatch all「雑品入れ」状況を克服するためには、具体的な個別研究が大事であると主張する。そのために吉田氏はsocialization into sports よりもSocialization via sportsに注目し、青年期以降の「スポーツによる社会化」研究の一環として「バーンアウトに陥った」スポーツ選手のアイデンティティ回復の事例を分析する。

(2)山口泰雄（神戸大学）「スポーツ阻害者の社会化過程」
山口氏は従来のスポーツ社会化研究のほとんどが、スポーツに参加する人々を対象にするものであり、当該の研究の進展はむしろスポーツから除外されている人々、ないしはスポーツを除外している人々の研究にこそ期待できるとし、チクセントミハイの「フロー経験」を枠組みに分析をすすめる。つまり、このようなスポーツ阻害者の発生は、少なくと

れる。②男性には年齢に偏りなくチームが存在するが、女子の場合は中学校年代のチームが非常に少ないという偏りがみられた。③日本女子サッカーリーグに登録する選手のスポーツキャリアをみると、中学校年代にサッカー競技歴の中断がみられる。

以上、二つの発表に対して会場から質疑がされたが、それらを踏まえて、司会者からの若干のコメントをしたい。その第一は、さまつなことかもしれないが、発表の時間配分や資料の使い方にもう少し工夫が欲しいこと、そして第二は、研究の目的と方法によって得られた「結果」そのものを述べて欲しいということである。特に後者は、学問的禁欲の問題として研究者が心すべきことと思うがいかがであろうか。

江刺　正吾（奈良女子大学）

【第３会場・前半の部】

第一報告者の岡田光弘さんは、社会構成主義の立場から、昨年話題になった日本のＦＡ制度について、ＦＡ制度を推進する側の「クレイム」の分析を、マスメディアの言説を素材に考察を行った。具体的な「クレイム」分析に入る前に、社会的構成主義の立場からの成員によるレトリック応酬をめぐる一般理論について、［レトリックのイディオム］［対抗のレトリック］［モチーフ］［クレイム申し立てのスタイル］［クレイム申し立ての舞台］という枠組みをめぐって、特に前２者の概念の詳細かつ明解な解説が行われた。その上で、昨年のＦＡ制度導入における推進側のレトリックの構図を、そもそも存在していた人権問題という「権利のレトリック」の背景化の一方で、「プロ野球の人気の地盤沈下」という「喪失のレトリック」や「球団経営努力の不十分さ」といった（機構の）「不合理のイディオム」の生起への展開について考察を加えた。

第二報告者の原田達さんは、自身の二度にわたるフルマラソン参加体験をふまえて、フルマラソンを、現象学的社会学の視点から考察を加えた。原田さんは、まず、フルマラソンの現状を簡単にレポートした上で、マラソンを労苦としての「旅」との類似からとらえ困難の「乗り越え」とその結果としての「新しい自己」の再生という視点から考察を開始した。その上で、極端な「接近可能性」（原理的「解散」）と極端な達成不可能性（実質的な「閉鎖」）の併存の上に成立している近代的「選別」の論理において、フルマラソンの完走者が、一種の（疑似的）「勝利者」として現れるという指摘を行った。さらに、現実のフルマラソンにおける「同行者」集団の形成の社会的意味や、消耗のスポーツとしてのフルマラソンを、社会関係・社会的紐帯の「単純化」や「世界解釈図式」の単純化という観点から把握するという興味深い指摘を行った。最後に、参加者にとってのフルマラソンの意味を、日常からの脱出ではなく、日常の「再構成」と日常との「和解」への収束（単純化された日常への回帰）という視点から総括された。

第三報告者の遠藤竜馬さんは、モータースポーツを社会学という俎上に乗せるための、基本的な立場について、ビデオなどを駆使して報告してくれた。とくに、現在１０万人のオーダーで存在しているという「ローリング族」の問題を、スポーツ文化の問題として考えたいという問題提起から始まった。なかでも、単に受動的な「スピードの快楽」にとどまらぬ、能動的なマシンコントロールの中に楽しみを見いだす「ドライビング・プレジャー」という視点などが提出された。また、同時に、今後、現在のスポーティ・ドライビングをめぐるディスクールの貧困さ（あるいは「社会的マイナスイメージ」という歪み）の問題を、知識社会学的に分析していくという方向性が示された。

その後の討論も、さまざまな立場から活発な意見が提出された。岡田報告については、社会構成主義の理論の説明、構成主義の理論とその応用との関係の可能性の問題や、レトリックの外部に存在する要因についての問題などの質問が行われた。また社会構成主義における身体の問題についての意見も出た。原田報告については、他の大衆参加型のスポーツとの関連や、岡田報告と関連させるなかで、参加者の身体性をめぐる質問などが出された。遠藤報告については、報告のなかで使用された「スポーツ」概念についての質問など

こされた。
個々の報告の独自性とともに、意味や身体といった共通のテーマからの切り込みを可能する部分もあり、全体としてそれなりの議論の深まりを達成できたのではないかと思う。
伊藤　公雄（大阪大学）

【第3会場・後半の部】

(1)フィットネスの文化　河原和枝（大阪大学）
本研究は「フィットネス」を一つの文化現象と捉え、ボディ・コンシャスな現代社会の意味について三つのコンテクストから考察したものである。
「消費社会のコンテクスト」から見るならば、現代人が行っているのは「フィトネスなライフスタイル」の消費である。
「イデオロギー論のコンテクスト」から見れば、「美」と「健康」は個人が努力して獲得すべきものとして規範化されている。これは近代社会のイデオロギーであるとともに自己の解放の感覚やエコロジーとも結合し、その意味では脱近代的な側面を持つ。また客観的には、フィットネス現象は高度産業社会のイデオロギーと結びつき、「社会的身体」と「個人的身体」を「フィット」させるのイデオロギーとしての機能を持つ。
「社会意識論のコンテクスト」から見れば、「フィットネス」文化を通して、特に女性の身体と性をめぐる意識変容が生じた。それは女性自身の身体の意識を解放し、身体を「ファッション」化した。
［質問・意見］
ライフスタイルの問題を、人間の生きがいの問題と関連させて扱ってはどうか。

(2)若い女性の痩身づくりを生み出す「肥満・痩身」観　田中励子（奈良女子大学）
本研究は現代の「肥満・痩身」観がそれぞれの文化で共有される価値観によってどのように形成されているかを、日本・韓国・フィリピン間の比較を通して定性的に明らかにすることを目的としたものである。考察に際し、メディアによって社会が女性に期待する審美的容姿が再構築され、その容姿を維持するため「健康」を名目とする食事観・服装観が形成されるが、若い女性たちはこれらの価値観と自己との間で生み出される葛藤を自らの身体を通して解決しようとする、とする基礎モデルを提出した。
日本の場合、痩身づくりは、身体の"reform"行為として、自己観あるいは自己アイデンティティが託され提示されていたが、理想としての痩身と男性にとっての理想である女らしい身体というダブル・スタンダードを持っている。
韓国の女性は健康や"body-conscious"な文化の影響をさほど受けておらず、伝統的な社会や男性から期待される性役割としての容貌の価値基準に支配されていると考えられるが、メディアによる多様な考え方も生まれつつあり、現代の変動する社会におけるセクシュアリティの葛藤の中で、新たな女性像を形成しようとしている。
フィリピンの場合、上流階層では女らしいが引き締まっている体型が好まれ、庶民には肥満していることが裕福さの象徴とされている。しかし米国文化の情報を受容した若い女性を中心に、西洋的なライフスタイルを是とする傾向がみられる。
［質問・意見］
インフォーマントが高学歴の女性に偏っていないか。
痩身願望は失われた身体や精神の断片を取り戻そうとする現象と考えてよいか。
韓国人、フィリピン人の日本人に対するコメントの方が意味があるのではないか。

(3)ボランティア・少年スポーツ指導者における指導没頭に伴う生活支障とボランティア意識に関する日・米比較　松尾哲矢（福岡大学）、多々能秀雄（九州大学）、大谷善博（福岡大学）

本研究は地域スポーツ指導への過度没頭による生活支障の発現の有無を、主にボランティア指導者としての役割観念とその背後にあるボランティア意識に求め、日本と米国のボランティア指導者の指導に伴う生活支障の実態とボランティアをめぐる諸意識について、役割理論の立場から指導への過度没頭状態をスポーツ指導者役割への役割同一化に伴う役割距離感の喪失過程として捉え、指導への過度没頭による生活支障の回避のために形成すべき役割観念、意識を指摘した。

米国ではボランティアを社会的使命（社会的一犠牲的）と捉えており、日本では余暇的と捉えているが職業や家庭内義務活動への指導活動の割り込みや金銭的負担を容認する意識が極めて強い。つまり米国の指導者はボランティア活動に対する強い社会的使命感とは逆に、他の生活領域とのバランスをとりながら行う役割観念が内面化している。換言すれば役割遂行が十分可能な役割容量を持ち、かつ適正な役割観念を形成していることから、役割距離感を喪失することなく指導活動を継続していると思われる。一方日本の指導者の実際のボランティア指導に関する意識においては過度の役割同一化傾向が認められ、他の生活領域における自己犠牲を容認する意識が形成されているように思われる。

［質問・意見］

日本の指導者の余暇志向性と自己犠牲的意識とは矛盾しないか。

英文質問紙の作成手続きは適正であったか。

(4) 司会者の感想

河原氏、田中氏

「健康」という現代生活におけるキーワードの内実を精査してほしいと思いました。健康概念が価値無媒介的に「良いもの」と捉えられている傾向はないのか、健康になるという営みが「身体」を肉体化し、かえって身体を主体から引き離すことにはならないのか、変身願望は一種の幼児返りではないのか。あえて「体育的立場」からいえば、今後身体的健康や美が生きがいや幸福に連なる条件についても明らかにして戴ければと思いました。

松尾氏

日本の指導者にみられる「役割同一化」の程度を「過度」といってよいのか、それは日本における指導者に対する正当な役割期待に添うことではないのか、という疑問が残りました。つまり過度という時、その基準は何なのだろうかが気になりました。資料によれば指導に伴う生活支障認知には日米間で有意の差はありません。また「体育的」視点に立てば、指導への過度没頭がnecrophilousなものかbiophilousなものかを知りたいと思いました。

今村　浩明（千葉大学）

【第４会場・前半の部】

学会事務局から先の大会での司会担当部会のまとめ原稿を求められたが、このことを失念してしまっていたために、手もとにある抄録集から再構成せざるをえないことになった当日の発表と異なる点があるかも知れませんが、どうかお許し願いたい。

(1)「子どもスポーツを対象とした解釈的面接法の検討」山本清洋氏（鹿児島大学）

氏は子どものスポーツ経験はどのようなものかを実証的にとらえようとされた。その折りに旧来の方法では困難であるので、新しい方法をあみ出さざるを得ないとされ、その方法を解釈的面接法として提唱された。それは旧来の参与観察法に、Ｖ．Ｔ．Ｒを導入することで、行為者の経験をより精密に測定しようとするものである。

まず子どもがスポーツする場面を集録し、その編集された録画を子どもたちと見ながらインタビューを行う。そしてこの場面を録画して今度は、この二つのビデオをスポーツ指導者に見せる。このように二重、三重にインタビューを重ねることによって、子どもたち

のスポーツ経験、とりわけ意味体系をとり出し、そこに指導者たち（コーチ、監督）の意味体系がどのように影響を及ぼしているかをさぐろうとするものであった。興味深い調査ではあるが、当日の発表は口頭によるものであり、実際にビデオを見ることもなかったために、少し説得力に欠けた点がおしまれる。

(2)「ラジオ体操に託された近代」黒田勇氏（大阪経済大学）

氏はラジオ体操が近代日本の社会において持った意味について考察された。１９２８年に開始されたラジオ体操は、２０年代に民衆の日常生活の中に浸透しはじめた「近代的なもの」との関連において理解されなければならないという。氏はデータとして当時簡易保健局が行った講演や募集された感想文などに求め、それらを分析しながら次のようにまとめた。①健康とは個人の日々の努力によって維持・達成されるべきものとなったこと。②ラジオ体操は近代人にふさわしい身体づくりの方法であったこと。③前近代的な時間感覚をラジオ体操の身体づくりで、近代的な時間感覚につくりかえたこと。M．フーコーにならって言えば、規律・訓練化された身体が造り出されることによって、近代なるものが実される必要があった。この点を氏はラジオ体操というユニークな視点から論証されようした。この興味深い発表に対して会場から質問、反論が集中することになった。たとえば、ラジオ体操よりも軍隊の行った身体技法にこそ注目すべきではないか、ということなどである。

(3)「『場所』としてのカシマ・スタジアムー『空間』の『経験』による『場所』化ー」加藤朋之氏（筑波大学大学院）

氏はＪリーグの成立にともなって、いちやく有名になった鹿島町とアントラーズとの関連を、空間の問題としてとり上げようとした。現象学的地理学の方法に依拠して、人々が空間をいかにとらえ、経験の上に地図化しているかをとらえようとした。たとえば、クラブハウスへ行ったこともないのに町民たちはクラブハウスへの道を熟知しており、いわば、クラブハウスがランドマークとなっていること。こうした点を氏は実際にフィールドワークして、その折りに撮った写真をスライドで提示しながら、説明された。しかし、それ以上に議論は進展を見ることもなく、ほとんどスライドを見ることで終わってしまった感がある。面白そうなテーマではあるが、スポーツ社会学の研究における位置づけ、テーマのしぼり込みなどが今後において望まれる。

以上三者の方々に一見共通性はないかに思われるが、意味＝経験、身体、空間という具合に結べば、やはり結びつきが見えてくる。それは、身体をめぐる、あるいは意味をめぐる問題といってよいだろう。この古くて新しい点へ、スポーツ社会学はいかにアプローチていくか。これは今後とも我々に残され続けていくテーマであるだろう。

亀山　佳明（龍谷大学）

【第４会場・後半の部】

この部会では、渡辺潤（追手門学院大学）「スポーツにおけるファン現象」と伏見勝利氏（オレゴン州立大学）「アメリカ社会における柔道の受容過程」の発表が行われた。

渡辺氏の発表は、最近のＪリーグ・ブームの中で現れつつある新しいスポーツ・ファン現象ーサポーターとかかわり、興味深いものであった。とりわけ氏は、社会学におけるファンの定義を検討しながら、文化資本の特性とファンの関連を取り上げ、マージナルな文化ジャンルにおいてファンが存在することを問題とする。そしてポピュラー文化におけるファンは、メディアの受動的な操作対象ではなく、商品文化に参加し、それを再生産する存在であると主張し、文化とのコミュニケーションのタイプから、スポーツ・ファンは見る・参加する・傍観する存在と位置づけ、これを大衆文化論的視点から批判するか、ポピュラー文化的視点から積極的に評価するかが課題となるとした。

伏見氏は、米国の柔道家と日本の柔道家の柔道をめぐる価値意識の相違を調査し、その比較検討の結果を報告することにより、米国社会における柔道の受容の文化的変容の問題を説明した。氏は、日本の柔道家が免状や柔道衣、帯等を大切にするのに対して、米国の柔道家は競技会やイベントの際に仲間で交換したバッチや写真を大切にする点に注目し、米国での柔道が家元的権威性を弱めて受容されたと主張した。

両者の発表に共通するものを探すことは困難であるが、敢えて言えば「スポーツを好きになる」ということの意味であろう。ある意味で、渡辺氏の研究では、フェティシズムの対象が特定のスポーツの選手やチームであり、伏見氏の研究では、大切なものがそれに当たる。この辺りから見ると、何か新鮮なスポーツ文化論の展開が期待されよう。

佐伯　聰夫（筑波大学）

## 4．『一般シンポジウム「スポーツと身体をめぐる問題について」』

### 近くて遠きもの・・・”身体”

この度の第3回日本スポーツ社会学会大会の一般シンポジウム「スポーツと身体をめる問題について」に於いて、シンポジストのひとりとして報告させていただいた。

そこで報告、議論された内容にも触れながら、”身体”と社会について、思うところを記しておきたい。

”スポーツと社会””スポーツにおける社会”というフレーズに焦点を置いてきたスポーツ社会学においては、これまで身体論は看過されてきたといえるであろう。スポーツ生理学等の自然科学的アプローチの隆盛、そのことに対する人文・社会科学的アプローチからする限界の指摘といった消極的な文脈のなかで言及に留まっていたように思える。

社会学の学祖とされるコントやスペンサーによる社会有機体説も、社会の説明には生物学という先行学問に依存せざるをえなかったのだ、という消極的解釈ですまされていた。気になる点はありながらも、生物や身体をメタファーとして使った巧みな社会の斬新な解釈であるなどとは、主張されなかった。

ところでシンポジウムでの筆者の報告は、比較的これまで身体についての研究が蓄積されてきている隣接分野、スポーツ哲学における身体論研究をレビューし、社会学的研究に活かされることができるどのような社会的視点（あるいはその萌芽）がそこに認められるか、という主旨であった。

物体、肉体、身体とサブ・カテゴリー化される”からだ”のうち、身体に焦点をしぼり、”立ち現れ”、つまるところ意識として現象してくる限りでの身体を研究対象とする現象学的アプローチは、自己ー身体ー（環境）世界、という枠組みをともなう。意味を受けめる主体の側の原基として人間身体に高い位置を与えるこのようなアプローチは、身体活動に馴染んできた者のなにがしかの期待をさそう。

このような枠組みと成果が有効であるとすれば、自己と世界を媒介する位置におかれた身体のスポーツによる運動化が、自己の世界の拡がり、環境世界についての知覚・認識の深まりにもたらす固有の貢献が何であるかということが課題として示されることになろう。

しかし、日本の体育における現象学的研究の先駆者ともいえる篠原助市の”身体の意志的形成”論にみられたように、社会的大状況を”括弧入れbracketed”した現象学的アプローチの限界も同時に指摘しておいたところである。

黄氏の報告は、身体（ないしは身体活動）が如何に社会的・歴史的な刻印をうけているのかといった、いわばオーソドックスな研究の流れにそったものであったように思う。特に、顔に関することわざ、慣用句等の日韓の比較研究に基づいて、「内面（個人の規範）を重視する韓国語」に対し、「面子（社会性）にこだわる日本語」という対比的指摘がなされた。

一方岡崎氏は主に学校における身体活動の種々の問題点を指摘された。例えば”前なら

え”が、真っ直ぐにならばせるためというよりも、他人と話をさせないために、さらには実用的な意義ではなく、生徒であることを自覚させるための”象徴的意義”を内面化させる手段として多くの集団身体訓練が用いられている。

既に、九州大学の多々納氏等によって、スポーツにおける日韓比較研究が着手されているが、それらも合わせて、身体諸活動を通して、そこに表出されている意志、意識、さらには国民性、の追究という文脈に置いてみるとき、多くの身体（活動）研究を通底している課題意識が見いだされるような気もする。

黄氏はさらに「メタファーとしての顔（身体）」という問題領域も設定し、スポーツと身体の研究にも応用することができるのではないかと提案している。

平野氏の報告は、近代社会を読み解く鍵として身体（文化）概念を称揚したものであったように受けとめた。近代における社会を読み解くために身体がメタファーとして使用されるのには本質的な背景があるとして、わたし共には及ばない広い知的バックグランドに基づいた文献の実証的な研究を進めておられるようである。へたな解説で趣旨を歪めてはならないので、「スポーツ社会学研究第２巻」所載の当該論文の精読をまたなければならないが、わたしの問題関心に即していえば、つぎの氏の結論的叙述における”身体”を”身体活動”ないし”近代スポーツ”に置き換えて、その妥当性の検討を今後の自らの課題のひとつとしたい。

「近代において身体がなぜ社会の最有力なメタファーになるかという理由を、われわれはこのように理解すべきであろう。どの過去の時代も、社会的機能を身体器官との比喩によってまったく語らなかったわけではない。しかし、それらとこれとは深度を異にする。同時にそのメタファーの有効性においても、質を異にする。近代の歴史は、実存の次元の『身体』と、超個人的存在である『社会的身体』との暗黙の共犯関係の形成を必要としたのである。それがときに公然に、ときに隠然たる、格闘のアリーナと化さざるをえないのもまた、避けがたいことであった。」

社会的契機の身体論への読み込みの限界にも留意しながら、身体活動を欠いては成立しない文化としてのスポーツから見えてくる社会とは……。ともすれば投錨点が容易に見いだしえない現代社会には、ambiguity を属性とする身体に準拠してしか解明されえない部分があるかもしれない。

岡田　猛（鹿児島大学）

## 文化としての身体ー『顔』の文化比較を手がかりにして

スポーツ選手の身体に限らず、一般に身体は社会的産物である。身体はその所持者の社的地位及び生活様式のなかで社会的相互作用をとおして、その身体の内部に蓄積され構造化された「文化的自然」である。身体の所持者は彼自身に自然化されている特定の文化としての身体を有するだけでなく、彼自身の身体を通して自らの文化内容を表す。

異なる民族社会において社会的構築物として身体を考察する際に、その民族の使用する言語を手がかりにすることができる。そこで、顔に関することわざ、慣用句の日・韓比較研究を行うプロジェクトに参加し、「顔」に関する言葉の日・韓比較を通して、次の三つの領域を区分した。すなわち、１．形態としての「顔」２．内面の現れとしての「顔」３．メタファーとしての「顔」（社会性を示す「顔」）である。形態としての「顔」は顔立ち、顔つきなど顔のあり方についての領域である。内面の現れとしての「顔」は、外面としての顔と内面としての心との関係、心の現れる場として顔についての領域である。メタファーとしての「顔」は、顔が名誉・面目、社会的交際、知名度、集団の構成員を意味するものとして使用されている領域である。「顔」について日本語は面子（社会性）を特に重視し、韓国語では内面（個人の規範）を特に重視する。また、顔と心（内面の動き）との関係において韓国語では顔は心を写し出すものと考えられている反面、日本語では両者は区分・分離されるものと考えられている。

これまでの「顔」に関する三つの領域を、日本と韓国の相撲競技における力士の身体の問題に応用することは可能である。両国の力士に対する、形態としての身体、表出としての身体、メタファーとしての身体の特質は、それぞれの民族の有する歴史・文化のなかで構築されている。力士の身体を美しく感じる際にも日本と韓国では感じ方が異なる。例えば、相撲競技を終え勝負が決まる瞬間の力士の顔・体の表現について、韓国では力士が勝ち負けの感情を表現することが美しいと考えられている反面、日本では力士が勝ち負けの感情を表出しないことが美しいと考えられている。

しかしながら、一つのスポーツ種目がオリンピック競技に採択されるようになれば、特定の文化的身体が象徴的権力を有することになる。ヨーロッパ文化に根づいた芸術性を追求するフィギュアスケート競技では、特定の規範化された身体美、すなわち、背が高く、手足が長く、気品のある体などの形態としての身体美、内面の動きを顔・体に豊かに表現する表出としての身体美を有する選手が象徴的権力の座を占有することになる。ここで、日常の生活において顔・体に感情の表出を抑制する文化のなかで社会化されてきた日本人の選手は、顔・体に感情を表出する文化のなかで社会化されてきたヨーロッパ人の選手より、その文化的身体のため、高得点を得るためには象徴的暴力を受けるようになる。

以上、スポーツと身体の問題について、文化の観点から発表を行った。この発表に対してフロアーからは、日本と韓国の女性の身体に対する美意識の差異に関する質問や、日本・韓国の文化の差を越えた美意識の表出としての彫刻（例えば仏像）の可能性に対する意見があった。今後スポーツ選手の身体を競技種目のそれぞれの独自性に注目しつつ歴史的・文化的産物として対象化することは意味あることだと思われる。

黄　順姫（筑波大学）

## シンポジウムにおけるボクの視線の先

ボクは、学校において権力がどのような様態を現しているのかを、自分が教師として、毎日やっていることから、特に身体教育を中心にして、反省的に述べたにすぎなかった。むろん、そこには「権力が悪である」という単純な発想だけではすまないという自覚がある。（ただし、だからといって、『反権力闘争』が必要ないなどとは、全く思わない。趣味的でもいいから、学校における権力者である校長たちのやりかたには、それ相応に徹底して闘争すべきだと思っている。）

学校というところは、多かれ少なかれ「教師と子どもの権力関係形成」をその任務の一つとしているところがある。「生き生きした子どもの育成」の大合唱という建前は、現実の本音の前では、大きく崩れている。もう少し、子どもをしっかりと見据えて欲しいということを、教育関係者に対して、ボクは、お願いしたい。

教育の始まりは、被教育者の身体の操作である。そのことは、いままでいろんなところに書いてきたり、発表してきたので省略するが、近代教育が始まったころから、そのことは間違いないようだ。ところが、その時の身体は、健康観や医療観・人生観に大きく基礎づけられており、その常識的健康イメージを「真理」として支配する学校の身体はまさしく「権力の舞台であり対象」になっていく。

それにともなって、「身体的技量」もすぐれていなければならないことになり、様々な「スポーツ」が学校に身体＝権力の教育手段として導入され、今や「すでに昔からあったもの」という感じで、体育・クラブ等であつかわれている。しかも、行政のスポーツ政策は、一人一人の「国民」にもスポーツをやらせようと「大きなおせっかい」をやいているし、研究者や学校の教師もそれに手をかしている。全く、身体の大安売りである。

その基礎作りを学校がやっている。基礎作りとは「よきスポーツマン」「すぐれた金メダル志向スポーツマン」「消費行動＝スポーツの消費者」を育てることであり、それ以外にはない。それは、主体的に行動的に自覚的に「従順に支配されるスポーツマン」になることである。「多様性の秩序」を形成しようという文化主義者たちが、スポーツ市場をタ

ーゲットにして一儲けする。
しかし一方で現実に子どもをめぐる状況を見れば、スポーツなんか大して必要としない生活になっている。実際にスポーツクラブやスポーツ少年団などは、スポーツ集団というより、新しい「共同体を求める市民の子ども会」に過ぎない。むかしからの地域共同体の崩壊によって、また地域の子ども達の異年齢集団の解体の代替をスポーツにかこつけて集めているにすぎない。スポーツは、単なる「きっかけ」なのだ。スポーツは集団を統合し管理するためにはもってこいの文化である。「ファミコン子ども会」より「スポーツクラブ」の方が「健全」にきこえる。しかも、指導者にとって、子どもたちに、一体感を感じさせることが容易である。「スポーツクラブ」は、秩序ある社会生活を営めるように「スポーツの場を利用しての訓練」という単純で本質的な理解が意外とできていない。
生活や人生に自分でなにかしら充足感が得られない人が、大体においてスポーツをやっている。それは、別に悪いことだとは思わない。しかし、べつにそれほど「偉い」ことでもない。「仕事中毒」も「スポーツ中毒」も「万引き中毒」も同じようなものだ。みんな犯罪的であり、快感も得られるのだから。文化的に見ても大差ない。そこに、差を付けよと一生懸命なのは分かるが、それをボクはことごとく破壊し、新たな構築もしてみたい。
ジア大会や国体が「崇高」であるなら、反アジア大会闘争や反国体運動も「崇高」である。体育授業を一生懸命やる子どもも、体育嫌いで授業をボイコットする子どもも皆偉いはずだ。こうしたスポーツをめぐる徹底した相対化と客観化から、何が見えてくるかが、もっぱらボクの関心事であり、今回の視線の先であった。
だから、一方的に「今の子どもは運動不足」だとか「今の子どもは遊びを知らない」と糾弾する良心的な大人や教師・研究者には、そういう大人自身を徹底的に客観化すべきであると言いたい。せまい都市を、車の渋滞の中、自転車でスイスイとコンビニめざして走る子どもたちや、学校を休んで「株式市場銘柄の動向」を調査している小学生をもっと「見直す」ことが必要だとおもう。
さて、当日のシンポジウムはそれなりにボクも「楽しめた」ので、あまり不満はない。強いて文句をいうとすると、フロアーからの質問に『内容の大して無いようなもの』が多かったような気がすることくらいである。話が長いわりになにを言っているのかよくわからなかった意見もあった。そういう時は、「ボクの頭がわるい」のか「発言している人の内容が無い」のかあるいは「運が悪かった」のかしかない。ボクは、どんなパネラーの意見でも明確な立場（政治的・思想的だけでない）の無いものは、聞くに値しない、時間の無駄だと思っている。書き言葉と話し言葉は違う。論文での闘論と、ディスカッションでの闘論にはおのずと違いがあるはずだ。パネラーを「よいしょ」するような意見は、余り生産的でないようにおもう。時間があれば、ボクの方から他のパネラーやフロアーの意見質問したいことや、その意義などを質したいこともあった。以前に東海体育学会で、パネラーの場にありながら、フロアーのくだらない（ボクがそう思ったんだけど）意見に闘論をいどんで、その場の『顰蹙』をかったが、結局その方がみんな楽しかったらしいし、ワクワクドキドキしてよかったらしい。後で、「失礼な奴だ」とブツブツ言っている人もいたけど、その程度ならどってことはない。そういう点からいうと、今回は、いまいちエキサイトしなかっただけに、ボクは『反省』している。
いずれにせよ、身体（論）ブームのスポーツ社会学界ではあるが、こうしたシンポジウムが、もっと日常的にあちこちで行われ、情報としてみんなに行き届くととおもしろくなる。一緒に座っていた他のパネラーの研究者の三人も、みんななかなか魅力的な方だった。しかしもう少し、時間をかけた「闘議」があれば、もっとおもしろかったと思う。またどこかでお会いしたらよろしく。ボクは勉強になりました。（今年の8月ごろ『（仮）今日も行くがや体育教師』を風媒社より出版予定です。よろしく。）

岡崎　勝（名古屋市立植田南小学校）

## 「身体文化論の意義」概要

わたくしの報告の眼目は、近代とは身体が人間をめぐる生物的要求と社会的要求との「格闘のアリーナ」と化すにいたった時代であり、その格闘は今日にいたっても終わっていない、という認識を表明する事であった。前年度第２回大会のホーン氏のモダニティーにかんする判断と、この点に関しては共通するところがある。同時にこの格闘が、本質においては変わらないものの、１８世紀、１９世紀、２０世紀という時代の経過とともにしだいに様相を変化させたことを考察する点に、いいかえると「身体論の歴史的背景」を考察することに、報告の目的があった。

報告に先立つキーノートスピーチにおいて、ピーター・ドネリー氏は今日では身体が、西欧的な「客体としての身体」の道具的意義と、東洋的な「主観としての身体」の美的・コミュニケーション的意義という両極だけでなく、この両極を架橋する「訓練を加えられる身体」、「性差をつくりだす身体」という二つの問題性に即しても研究される必要があると指摘した。「訓練を加えられる身体」と「性差をつくりだす身体」という視角は、文脈を変えればわたくしの報告にとっても有用であり関連が深い。

上に述べた二つの異なった要求の「格闘のアリーナ」として、近代社会は身体という場を発明した。この発明の結果として身体が刻印される性質が「訓練を加えられる身体」であり、同時に「性差をつくりだす身体」なのである。１８世紀において前者の側面が問題になったことは、フーコーが『監獄の誕生』の中で論じている。同時に、１８世紀啓蒙思想の中で女性の身体が社会的徳性の担い手という意味付けを付与された。この「第一次フェミニズム」の中で、性差も発明されたのである。１９世紀になると、男女を問わず人間の身体は工場制工業の技術と産業社会の道徳とに適応すべく訓練される対象となった。その訓練を可能にする要因は「欠乏」であった。社会学は歴史的にはこの産業社会の確立を無意識の前提にして成立した。そこには近代社会への賞賛と危惧とが同居していた。工場労働へと訓練された「生産する身体」が生む大量の商品は、やがて消費されるしかない。このジレンマが生み出したのが２０世紀の消費社会である。そこでは「欲望」が「欠乏」に取ってかわる。身体は消費するための身体であることを要求される。これが今日の状況である。

討論の中で提起されたさまざまな問題点のうち、２つにかぎって触れたい。第１は、上記の身体論はスポーツ研究の領域に関しては広すぎないかという問題、第２は、前期の「格闘」の中から何らかの対抗文化がスポーツに関連して台頭していると考えることはできるだろうかという問題、である。いずれもきわめて重要なので、不十分ながらあらためて考えを述べさせていただきたい。まず前者に関しては、現象的にはたしかに広すぎることに同意する。しかし同時に、わたしは現代のスポーツをめぐる諸問題もまた上記のような格闘の様相と無縁でなくその中で生起していると考える。具体的研究の中にいかに生かすかは今後の課題であるが。後者に関しては、対抗文化とは思想・態度・行動の総体なのであるから、スポーツに可能性があると同時に、それだけでは対抗文化たりえないとも考える。ちょうど６０年代対抗文化が音楽・ドラッグ・裸体のどれによっても語りうると同時に、それらだけによっては決して尽くせないように。

平野　秀秋（法政大学）

## 「一般シンポジウム」報告

＜討論＞

上記の４報告に対してフロアから活発な質疑とコメントが寄せられたが、主要なものを整理すると、次の８点ほどにまとめることができる。

(1)現象学的な意味での「身体」と「精神」との関係、および両者の統合について（滋賀大・沢田氏）、(2)若い女性の痩身づくりなどに見られる「自然」と「文化」（人工性）と

の関連について（奈良女子大・田中氏）、(3)「顔」についての考え方などにみられる韓国女性と日本女性の違い（同）、(4)近年なぜ身体が問題にされるのか、それは身体の持つアンビギュイティのせいではないか（龍谷大・亀山氏）、(5)第一報告（岡田氏）と第4報告（平野氏）とをつないで考えると、近代化の進展と「生きられる身体」との矛盾が高まり、からだの側からの反抗が生じ、それがたとえば摂食障害のような形で現れているのではないか、またこの矛盾を乗り越えるためにはある種のミスティシズム思想が有効ではないか（同）、(6)スポーツは「対抗文化」としてどの程度の意味をもってきたか、また現にもっているか（京都教育大・杉本氏）、(7)このシンポジウムでは「身体」の問題をもっとスポーツに引きつけて扱う必要があったのではないか（同）、(8)消費社会における身体の問題、とくに身体そのものが消費のフロンティアと化していく過程についてS・ユーエンの議論がとりあげられたが、他方にはP・ブルデューのような考え方もあり、両者のズレをどうとらえるべきか（筑波大・松村氏）など。

これら多岐にわたる論点のそれぞれについて各報告者から応答やコメントがあり、またフロアからも「自然」と「文化」の関係について明快な発言（大阪学院大・池井氏）があった。全体として討論はたいへん活発であり、時間の不足が惜しまれた。

「身体」というテーマは、近代が画然と区別してきた二項対立、たとえば自然と文化、主観と客観、肉体と精神、理性と感情、言語と行動といった二項対立の境界に跨がり、これらの二元論を越えてゆく可能性を含んでいる。だからこそ近年、さまざまの形で注目されているわけだが、あまり性急にこれらの対立や矛盾を「統合」しようとすると、たとえば「心身一如」を標榜するかつてのファシズム体育思想のようなところに思いがけず落ち込んでしまうといった危うさもないとはいえない。だから、さしあたっては、性急に「統合」を求めるよりも、亀山さんの指摘されたアンビギュイティのなかに踏みとどまることのほうがむしろ大切ではないかとも思う。

今回のシンポジウムでは、身体と社会との関係をめぐるさまざまの論点や観点が提示され、議論された。たしかに、杉本さんのご指摘のように、やや一般論に比重がかかり、スポーツに焦点をしぼれなかったうらみはあるが、「身体」という広汎なテーマを扱った関係上、やむをえなかった面もある。もっとスポーツに特定化した身体論の展開は、今後の課題としておこう。

最後に、力のこもった報告によって有益な問題提起をしてくださった報告者の方々、またフロアからの発言によって討論を充実させてくださった方々、そしてご出席の皆さま全員に厚くお礼を申し上げます。

井上　俊（大阪大学）

『今回の大会の運営を担当して』

今回は、第3会大会の企画や運営を担当しました。これは、私にとりまして、愛教大「現役」＜最後の最後＞の仕事でもありました。そのこともあって、大会の開催には私なりに努力しました。そこで、ここでは、大会を運営して思ったことや、今後の学会運営のことについて述べることにします。

1.新しい企画

今回の大会では、新しい企画を2つ取り入れました。それは、主としてアジアの国々からの研究者に報告をお願いした「特別シンポジウム」と、一般市民に参加を呼びかけて行った「公開シンポジウム」です。2つとも、たいへん成功だったと思っています。大会に参加した多くの方々から、良かったといっていただきました。一般の市民も、学会で発言できたことや、あるいはそれを聞くことのできたことを喜んでいました。

(1)「特別シンポジウム」について

「特別シンポ」では、幸運にも中国と韓国からの研究者に参加していただくことができ

ました。当初は、ブラジルからの研究者の報告も予定したのですが、事情で来日できなくなったのは残念でした。ご存知のように学会は金がありません。したがって、これらの研究者を招聘するとなれば、個人の力や努力に頼らざるを得ません。今回は、中国の藩さんの招聘につきましては、影山が中心となり、また韓国の林さんについては森川さんにご努力いただきました。

外国からの研究者をお呼びするのに、学会が中心となるということは、実際上、これからも難しいと思います。したがって、従来もそうであったように、個人（あるいは大学）が中心とならざるを得ません。しかし、学会として、多少なりともそれをバックアップしていくことはできるように思います。これから、学会ではそうした制度を作っていく必要があると思います。多少とも金銭的援助等ができれば、それを呼び水に外国との交流をもっと深めることができると思います。日本以外のアジアの国々から招聘するのであれば、旅費負担もそんなにかかりませんので、お呼びできる人が沢山出てくると思います。今回のシンポでは、それぞれの国における「スポーツの現状と課題」のようなことについて報告していただきました。私たちにとって、このようなお話しをお聞きする機会はあまりありませんでしたので、有意義だったと思います。私は、中国の「市場経済化」の問題にせよ、また韓国の「南北問題」にせよ、私たちの問題ではないか、という思いを強くしました。

(2)「公開シンポジウム」について

私は、日頃から、極端にいって、「男だけ」が"頭"を並べて「みんなのスポーツ」を論じているのは、どこかおかしいと思っていました。現在、スポーツは、いやおうなしに、みんなにかかわりのある問題となってきています。したがって、多くの人々に議論に加わってもらうことが大事であると思っていました。元来、スポーツ社会学会が作られたのも、そうした意図からではなかったと思います。

そうした意味から、今回の「公開シンポ」には、みんなと一緒になって努力しました。一番心配だったことは、一般の市民がどのくらい参加してくれるかということでした。しかし、努力の甲斐があって、多くの市民が来てくれました。ちょうど、愛知国体にも関係のあるテーマでしたので（そういうテーマを選んだのですが）、問題意識を持った人達が来てくれました。

世の中には、現在のスポーツのあり方に、疑問を持った人達が沢山いると思います。これらの人達をサポートしていくということは、スポーツ社会学会の課題でもあり、また学会をより大きくしていく道でもあると思います。端的にいうと、私は、スポーツ社会学会は、スポーツ市民運動の中心になっていくようにしなければならないと考えています。

なお、今回のシンポでは、いろいろな面で、研究者と市民の間にズレがあったように思われます。研究者は、一定の分野だけを専門に研究しているのですから、一般市民との間に感覚的なズレが生じてくるのもやむを得ないかもしれません。しかし問題は、研究者がそれをどう意識し、克服していくようにするかだと思います。その点でも、今回のような公開シンポは有意義だったと思います。

いずれにせよ、問題意識を持った人達を、学会の中あるいは回りに、どう取り込んでいくということは、現在の学会の大きな課題であるといえましょう。したがって、学会としても、そのための方策を真剣に考えていく必要があると思います。しかし、上記の課題の達成には、個々の研究者の、日頃の研究実践によるところが大きいと考えられます。その点で、スポーツ社会学研究の原点はどこにあるのかについて、皆で継続的に再吟味していくことが大事だろうと思います。

2.学会の今後の運営について

本学会も4年目を迎えました。今後これをどう運営していくか、学会として正念場にさしかかってきているような気がします。学会を作るのはそう難しいことではないかも知れません。しかし、問題なのは、それをどう運営していくかです。

スポーツ社会学的研究を深めていくのは、学会として中心的課題であることはいうまでもありません。学会大会の開催もそのためであり、また機関紙の発行も絶対的に必要なことだと思います。しかし、これらが、一層その有効性を発揮していくためには、今後いろいろな試みが行わなければならないと思います。今回の大会の新しい企画も、その試みのひとつでした。

今後の運営を考える場合、学会の現状に対する自己反省が必要だと思います。考えてみると、その後会員もそう増えませんし、また、まだ4年目だというのに、もうマンネリ化の傾向が見え始めてきています。学会大会を開き、機関紙を発行すればそれでよしとするような傾向もそれです。

社会学的研究が進んでも、スポーツ問題が一層深刻さを増すようでは、何のための研究と批判されるでしょう。私には、どうもそのような傾向が生まれてきているように思われてなりません。社会学研究をしながら、その研究の"社会性"が希薄になってきているのです。単に業績を発表するだけの場であれば、他にも学会はあり、スポーツ社会学会を作る必要はなかったかもしれません。

スポーツの問題性は、体育学やスポーツ学に関係してきた人の方が一番よく知っているずです。したがって、この人達が、社会学的研究に対しても、もっと問題を提起していく努力が必要だと思います。

学会は、単に大会を開催し、「ジャーナル」を発行していればよいのではありません。「地方シンポ」の開催や「スポーツ評論」の刊行、アジアとの交流の促進等、やることは沢山あります。これらの活動を通して、学会もより活性化していくことになるでしょう。ここで具体的なことについて述べる余裕がありませんが、今後学会は、次のような視点にたって運営されることを期待しています。すなわち、スポーツの現状に対して「批判的」であり、変革のために「実践的」で、「大衆的」視点（情報の公開等）と「世界的・アジア的」視点を持ち、研究に対して「自己反省的」であることです。学会は、何をしてきたかではなく、何をしてこなかったかとうことをもっと考えるべきでしょう。

影山　健（元愛知教育大学）

## 6．『学会に参加して』

### 身体のアジア的状況　　ー第三回日本スポーツ社会学会見聞録ー

今年はじめて春のうららかさが日本列島全体を包みこんだ二日間、スポーツ社会学会は市民参加者や海外からの参加者をも多数交えて開催された。

第一日目のふたつのシンポジウムでは、＜身体とは政治的存在に他ならない＞という主張と、＜権力から解放された身体が実体的に存在し得る、したがってそれを取戻そう＞という主張が、際だった断絶をみせながらも混在し、ディスコミュニケーションを起こしつつ衝突していた。この二つの立場は、まさに身体論にとって最も根元的な問題である。そして第一日目の議論全体が、この根元的問題をめぐる現在の私たちの状況そのものを露わにしたという意味で興味深いものであった。

前者の立場では、統制的段階から市場経済的段階のスポーツへという政治意志（中国）、スポーツから政治的色彩を抜くことによる政治的目的の達成（南北統一をめざす韓国）についての報告があった。また国民全体の身体向上をめざす政策（韓国）や、コミュニティの再生というスローガンを掲げて巨大スポーツイベントに人々を動員することによって帰属意識を高めようと意図する地方自治体の権力構造についての報告（福岡）も、政治的身体という認識は共通していた。これに対して後者の立場からは、スポーツイベントへの市民参加の問題、つまり実際に市民参加と銘打ったイベントの委員会に関わっているスピーカーの切なる体験談（広島）や、障害者スポーツに存在する障害者の詳細な区分けを通じて浸透している権力の告発がなされるとともに、トロプスの試みにかんする報告もおこな

われた。しかし、この二つの立場の間で横断的に議論がおこなわれようとすると混乱が起き、ついに議論は全く行われなかった。「分析の角度が異なる」ものの間で議論は成立しないという研究者的判断もあったのだから、それが良いとか悪いとか言っているのではない。ただ、このように混乱し断絶を起こしながらも同じ場所で議論される言説のさまざまな様相そのものが、奇しくも、身体をめぐるアジア的状況そのものを再現し、その豊かさと問題点をあらわしていたように思えたのである。

この第一日目の混乱のために、二日目にキーノートスピーチをしたドネリー氏は、交通整理のためのひとつの図式を提供した。「Body as object」、「Body as subject」、「Disciplined Body」、という三つの概念である。この三つの身体が存在することをあらかじめ整理することは極めて重要であり、そしてこれは最後の『スポーツと身体をめぐる問題について』というシンポジウムの主たる議論として引き継がれたのである。

二日目のシンポジウムでは、身体が主体と客体とに分類することができない領域、すなわち「Disciplined Body」こそが、近代的身体に内在する最も深刻な問題対象であることが述べられた。そこでは、現象学における問題の整理がなされた後、顔という身体メタファーをめぐる権力とアイデンティティのインタラクションにかんする国際比較、学校現場における身体の動きと統制力についての報告、さらに文化史的な観点から、十八世紀という近代の成立期に起こった身体への視線の変質についての報告があった。これらのスピーカーたちの報告全体を通じて、第一日目のシンポジウムの経緯をも踏まえて、そこで述べられた結論は、現在問題なのは、＜身体が政治的存在である＞か、＜身体は解放された実体的存在でありうる＞かということではなく、近代においてはもはやこの二つが互いに浸透しあってしまう身体なのだ。近代にみられるのは、「Body as object」でも「Body as subject」でもなく、それらが混じり合った「Disciplined Body」しか存在しない。だからこそ、「Disciplined Body」を巡って主体側からと権力側からの綱引きがここに展開されるのだ。これが第一日目に対する第二日目の答えであった。そして、その綱引きにはどちらが勝つのか、というフロアからの質問に、ふたりのスピーカーが、「Body as object」の側に優勢の旗を挙げたのが印象的であった。

このように今回の学会は、学会全体が初めから終わりまで互いに呼応し合うという、素晴らしく成功した学会であった。唯一の難といえば、意欲的な個人発表が四会場で行われていたため、興味をもった発表の半分ほどしか聞くことができなかった人が、多かったのではないだろうか。もう少し時間をかけて発表が重ならないよう工夫できないものか、と思った。

中江　桂子（日本学術振興会特別研究員）

## 「豊橋大会」で考えたこと

「随分様変わりしたなぁ。でも、面白くなったね。」

「ちょっと、参ったな！。」

どちらも「スポーツと身体をめぐる問題について」と題した一般シンポジュームの後、会場で聞かれた声です。どちらが多かったかは判然としませんが、井上先生を中心として関西の社会学プロパーの会員が増加することで大きくスポーツ社会学の学界が変化したことは間違い有りません。亀山さんが編集した『スポーツの社会学』（世界思想社）がこの変化に大きな役割を果したことも確かです。

シンポジュームのまとめは井上先生がきっとまた例の切れ味でなされるでしょうから、私は幾つか感想と共に学会の今後の有り方に提案をすることにしたいと思います。

欧米の思想史の中で身体を位置付け、かつ現代の「消費社会」は身体を消費の対象にすることをペシミスティックに語った平野先生を始めとして、黄さんの比較文化論的視座からの「身体論」と、大変広く目配りされた諸報告が「ちょっと、参ったな！」という声の原因であったろうと思います。それに対して「スポーツというテーマ」から少し逸脱して

いるという意見も有りました。（杉本さんでしたか？）僕は、外れているから面白いのだと思います。というより、岡崎さん、岡田さんの報告と前者のお二人のものと底流で繋がっていることを見て取りました。特に、岡崎さんの報告は現場感覚に富んだ示唆的なものであったことは、そのことを高く評価された井上先生だけでなく、フロアーの多くの人が認めているのではないでしょうか。

なぜ、私たちは「スポーツ社会学会」を設立したのでしょうか？

井上先生は、「従来の慣例や形式にあまり囚われることなく、また性急に『成果』を求めることなく、ゆっくりと進んでいくのがよいと思います」（「異なる領域間の交流」『日本スポーツ社会学会だより』創刊号 1991.12.10発行）と述べているのに対し、若手代表の田中さん（奈良女子大院生）は、「…スポーツ社会学、ひいてはスポーツ学独自の言葉がもとめられるだろう」（同　創刊号）と少々性急な姿勢が気になります。

社会学出身の会員の方々は決して「縄張り荒し」に参加したのではありません。社会学の世界の息苦しさに多少「辟易」されて、新天地を開拓したい思いで「気楽」に参加されて来ているのだと私は感じています。社会学の「頑迷さ」は関東地区からの参加者が平野先生の他数少ないことが実証している通りです。体育学出身の我々はそのことを「社会学する」必要があります。

日本スポーツ社会学会に参加した社会学出身会員には、「一騎当千」ということがあてはまります。『研究』に現れた論文のみならず、今回私が聞いた（伊藤さんが司会した）部会もそのことを示して余りあります。「マラソンの現象学ーフル・マラソンを記述するー」（原田達・追手門学院大）や「モータースポーツの社会学のための試論」（遠藤竜馬・大阪大学）という報告を聞いていてその感を強くしました。亀山さんの仕事（前掲書、「スポーツと日常生活にみる滑走感覚」井上俊編『現代文化を学ぶ人のために』世界思想社 1993年）とともに、こうした報告は体育出身者が得意とすべきアプローチの研究であったはずです。

つまらないことを書いてしまいました。田中励子さんの意気込みの中に感じた「焦り」（私も共有する）と井上先生の「静かさ」がこんなことを書かせたのかもしれません。また、原田さんの身体を使った新しい「社会学」に対して、僕も体を使った社会学をもっと実践しなくてはと焦ったのかも知れません。（からだに刻み込まれたことを聞き出すのは、体験を共有する人の方が有利に決っています。言語化する能力にも依存していますが…。）

さて、今回の第３回豊橋大会は大変盛り沢山な学会であったと思います。シンポジュームが２つ、オープンセッション、特別セッションに一般発表。内容的にはみんな興味があり、影山・新井野・中島の３先生を始めとする中京地区の先生方のご努力に心から感謝と賞賛の言葉を述べたいと思います。新井野さんの財源獲得努力と臨機応変な対応にも驚嘆しました。

ただ１つだけ難点を言わせてもらうと、一般報告が少し圧迫されたように感じました。特に、僕が聞いた前述の部会などはもっと多くの人が聞けば大変反響が有っただろうと想像します。また、ビデオなどを駆使した遠藤さんの力の入った報告も報われたのではと思います。（モータースポーツの報告をするために交通渋滞に巻き込まれたのは何とも皮肉でした。）せいぜい２部会で行くのが良いのではないでしょうか。次回の大会では日程の問題を含めて考えて戴きたいと思います。

松村　和則（筑波大学）

## From Denmark

Dear friends

I thank for the opportunity to take part in the the Annual Conference of the Japanese Association of Sociology of Sport in Toyohashi. It was a great experience.

Two things surprised me very much.

First, that common people was invited to take part in the conference, and that they took part in the discussion. Very interesting.

Secondly, that the "body" and "body culture" was the main topic at the conference. Body and body culture is really becoming a hot issue in sociology of sport.

I listened to the lecture "Sport and Body Culture" by the keynote speaker Peter Donnelly with great interest. I agree with him that we have only touched the surface of a complex field which has occurred in recent years.

In his lecture he showed clearly that we now are facing a much more complex picture of what we call sport. He mentioned a lot of different activities: athletics, soccer, gymnastic, dance, martial art, body building, military training, sumo, jogging and so on. We could also add: out door life, yoga, taichi, kiko, meditation and other activities.

The picture seems to be so complex, that we have to ask: what is the concept of sport? Is all these activities - Peter Donnelly mentioned - sport?

Of cource we can choose to use the word sport about all these activities. We can use the term "sport" as an umbrella, but I don't think it is the most clarifying thing to do. At least not from a historical point of view, which is mine.

What we do see today seem to be a significant erosion of the concept of sport. We seem to face an enormous shift in body culture, specially in highly developed industrial societies.

It has happened before in history. It happened more than 200 years ago in Europe, when sport came into being. Sport can be regarded as a Westerr phenomenon in the sense that the evolution of sport began in England when industrializa -tion also began. Sport became during the industrial period the dominating style of body culture.

From my point of view we have different styles of body culture, like we have different styles of architecture. Sport is only one style, like gotic is only one style of architecture.

Sport has also for many years been the dominating style of body culture in Japan. It started about 125 years ago. In the book "Trends in sports: A multinational perspective" it is mentioned about Japan "that the term "sport" was imported from the West". But it was not only the term, which was imported ; it was a new style of body culture, and that style was part of a new social and cultural structure.

Old styles based on other concepts than sport was either swept away like a lot of games among the peasants, or gradually changed into sport. The title: "Sumo - from Rite to Sport" by P. L. Cuyler, describe the general tendency.

But just these years we see new styles in the body culture ; and perhaps we also at this conference faced the erosion of the concept of sport -in sociology

of sport.

The future will be very exciting for an association, which has sport as a common concept !

Your sincerely

Ove Korsgaard
researcher Idræ tsforsk"
Denmark

## パースペクティヴとしての「身体文化」の可能性

身体についてのシンポジゥムの際、スポーツに言及した形での議論にならなかったことに欲求不満を抱いたとすれば、それは、これまでの「スポーツ社会学」がもはや現代の身体的状況をその射程に収めきれなくなったのだと理解することもできるのではないだろうか。オーヴェ・コースゴール氏が述べているように、身体文化という、より深くそして我の生や身体に密着したパースペクティヴから捉えることが必要になってきている。

デンマークのスポーツ社会学界の中では、この身体文化というパースペクティヴはすでにひとつのパラダイムとして位置づいているようだ。７０年代からみられていた表現活動、瞑想、身体的なセラピー、古くて新しいゲーム、アウトドア活動などの「ニュー・ウェーブ」の登場は、それまでのエリート・スポーツと大衆スポーツといった二項対立的な図式を超えた、もうひとつの見方を誕生させる契機となった。そして、チャンピオン・スポーツにみられるような結果ー業績主義や、健康や幸福のためにすべての人がやるようなフィットネス・スポーツに加えて、新たな波としてのダンス、ヨガ、緑の中でのウォーキングといった身体的経験からなる三元論的なアプローチが明確に打ち出されている。

デンマークの民衆学校の思想には、一言で言えば、生きることをトータルに考えること一人々が対話によるわかちあいや相互作用を通じて、共同性や歴史性に目覚め、人間の生の尊厳を知り、共生することの自覚をするーが中核にあって、政治活動や生活協同組合運動の中で、ごく自然に民衆の身体文化としての民俗スポーツや体操といった身体技法を捉える背景がある。決して身体文化としてのスポーツや体操を日常の生活から離して捉えないのである。

もちろん、ヨーロッパのスポーツ社会学や歴史学の中で、この三元論的アプローチは極めて特異なものである。しかしながら、我々が現在のスポーツの状況や身体について考えるとき、このことは極めて有用なヒントを与えてくれそうだ。コースゴール氏の同僚であったヘニング・アイヒベルク氏は、身体文化を以下のような三元論的アプローチで捉えるとから、身体とアイデンティティーについて考察している。

1)結果や記録の生産；高度な業績スポーツ、ヒエラルキー・システム、精密な測定に基づく。ー“スポーツ・ナショナリズム”のアイデンティティーにつながるもの。

2)社会的な規律・訓練；ユニフォームに身を包んで、隊列で正しい方法で動くことを命じられるもの。健康、衛生、教育といった名目で訓練されることで、共同体の精神や愛国心が生まれると考えられ、そこに自己陶酔していく。ー“ナショナル・アイデンティティー”につながるもの。

3)社会的な言語；コミュニケーションの媒体として身体を考える。われわれ自身の自然の体験や風景が身体運動の一部分を構成しているような民俗的なゲームやフォークダンスにおいて対話をしたり、笑ったりすること。ー“民俗アイデンティティー”につながるもの。

である。

我々の身体文化の長い歴史の中で、スポーツをひとつの身体技法として相対化し、文化的なコンテクストの中で捉えていくことが現代の状況を読み解く大きな力となるだろう。

スキーやサーフィンなどのエコ・スポーツの隆盛や武術の復権といった流れは、この第

3の視角に入る。身体そのものを通して自然や宇宙との、あるいはその状況下で人間と対話することの中には、人間がこれまで身体に刻み込んできた「自然」や「生」の全体性を、まさに主体としての身体を通して見つめる視線があるはずだ。もちろん、これまでのスポーツとその思想に対する批判が当然のごとく存在しており、そうした新たな状況を考えることは、身体が規律訓練化された方向に流れていく宿命に対して、新たな活路を見い出せるのではないかと思う。

清水　諭（筑波大学）

Ⅲ．会員異動(1994年6月現在)

<住所変更・所属変更>

| 氏名 | 所属 | 住所 |
|---|---|---|
| 田崎　健太郎 | 筑波大学 | |
| 中島　昌彌 | 追手門大学 | |
| 大野木龍太郎 | 浜松短期大学 | |

<新規加入会員>

| 氏名 | 所属 | 住所 |
|---|---|---|
| 内海　佳子 | 広島大学<br>大学院 | |
| 大東　貢生 | 佛教大学<br>大学院 | |
| 鎌田　彰仁 | | |
| 小林　勉 | 筑波大学<br>大学院 | |
| 庄司　興吉 | 東京大学 | |
| 杉浦　恭 | 筑波大学<br>大学院 | |
| 棚山　研 | | |
| 角田　聡美 | 筑波大学<br>大学院 | |

<訂正>

会員の電話番号の表記に誤りがありました。お詫びを申し上げるとともに、以下のように訂正いたします。

藤原健固

（正）

（誤）

【編集後記】

第3回学会大会が大いなる盛り上がりを見せたことで、今回の「学会だより」も質量ともに充実いたしました。原稿をお寄せくださった方々、本当にありがとうございました。就職活動の忙しいさなか、編集作業を中心になってやってくれたの橋本君をはじめ、大学院生の方々に感謝いたします。（清水　諭）